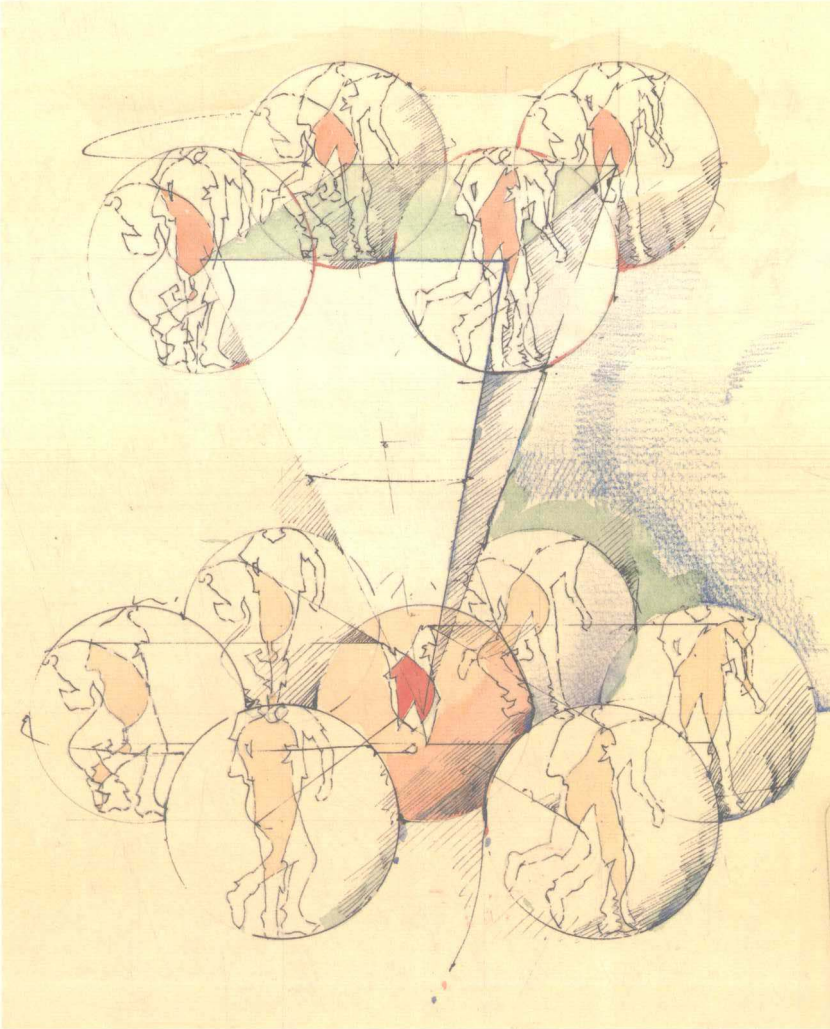
ことばと響き

多田道太郎対談集



ことばと響き

多田道太郎対談集

筑摩書房

著者紹介

多田道太郎　ただ　みちたろう

1924年生まれ。京都大学文学部卒。現在京都大学人文科学研究所教授。

著書『複製芸術論』(勁草書房)『管理社会の影』(日本ブリタニカ，初版読売新聞社)『しぐさの日本文化』(筑摩書房)『遊びと日本人』(筑摩書房)『物ぐさ太郎の空想力』(冬樹社)『風俗学』(筑摩書房)『自分学』(朝日出版社)『文章術』(潮出版社)『日本語の作法』(潮出版社)『ことわざの風景』(講談社)『本棚の風景』(潮出版社)『身辺の日本文化』(講談社)

ことばと響き　　1982年9月10日　初版第1刷発行

著　者　多田道太郎

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2—8

振替東京6-4123 Tel. 291-7651(営業) 294-6711(編集)

郵便番号 101—91

印刷・多田印刷　製本・積信堂

0036—85183—4604

©M. TADA Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読者係宛に御送付下さい．送料小社負担にてお取替えいたします．

目次

愛について　VS　富岡多恵子　3
純愛のイメージ　5
心中にいたる愛　9
愛のなりたちにくさ　11
結婚のなかのエゴイズム　13
家庭の危機　17
女であることの可能性　20
新女房読本　VS　井上ひさし　25
『日本亭主図鑑』はお祭りの囃子方　27
悪態と口別嬪　31
女の幼児性と男の幼児性　36
女の持久力と転換能力　39
女だけの魅力的な集団の組み方　46

自分のことば　VS　大岡　信　53
なぜ、「文章読本」が読まれるか　55
ことばの世代間の落差　60
ことばの息づかい　63
日本語の動作をとらえる論理性　66
自分のことばをどうとらえるか　72
外から見た日本語　VS　鶴見俊輔　81
外国人の使う日本語　83
「の」の字のはたらき　95
流れるようにつながる　102
松本清張と司馬遼太郎　VS　尾崎秀樹　115
登場—内的条件と外的条件　117
さめた眼—英雄否定　122
恨みつらみの迫力　127
成り上がる過程の人間の顔　131
南北の系譜と馬琴の系譜　136

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

歴史認識と想像力　141
方丈の思考　VS　立原正秋　149
『方丈記』と『徒然草』の距離　151
方丈の生活　154
儚い家遊び　161
家の美学　165
観察者兼好　170
自我の問題　177
隠者の型　183
義経など　VS　司馬遼太郎　189
スター誕生　191
談合屋の流れ　194
合理主義の始発　198
ゲリラ集団として　200
天下大乱の兆し　212
もう一人の英雄　215

二元的対立　219

現代文明と「毛づくろい文化」VS小松左京　225

「愛」の形式と内容　227
「毛づくろい文化」の提唱　229
再評価される「ニコポン」　231
セックスと権力という局所化　235
愛は「負い目」から生まれる　237
口説きと愛のかたち　241
井戸端会議は最高の価値　246
情報機械がつなぐ友情　249
愛のフィクションを信ずる　251

高度成長社会は何であったか　VS宮崎義一　255

文化文政・大正中期・昭和三十年代　257
昭和五十年からみた昭和三十年　260
核家族の出現と企業内の家父長制　266
欲望の空想力の形としての商品　270

効率性と委譲の論理　274
「法人という無気味な人間が歩いている」　277
法人の擬制と実在　281
フランスの「情報」と日本の「情報」　287
高い貿易依存度と外交　292
ハウ・ツー時代は終わった　297
あとがき　301

ことばと響き

——多田道太郎対談集

愛について vs 富岡多恵子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

純愛のイメージ

富岡　純愛なんていうことばは、いつごろから出てきたんですか。昔はあったかしら。

多田　昔はなかったでしょうね。おのろけといっていた。

富岡　映画の純愛路線が出てきてから大はやりになったのでしょうね。

多田　田宮虎彦が、亡くなった奥さんとの往復書簡集を『愛のかたみ』という本にしましたね。平野謙氏がたしかそういうことを指摘していたけど、あれが純愛というはやりことばをつくる一つのきっかけになった。田宮さんは、日本社会の男女の気分というものを変えるのにたいへん力のあった人だと思う。ひそかな愛というのはなるべく人目にふれないのがいいのに、それが人目にふれることを望むような矛盾した状態ができて、しかも矛盾には気づかない。気づきたくない。そういう気分がいわゆる純愛ものを書いたり読んだりする人の中にあるようですね。

富岡　そういうのはちょっとデリカシーを欠いているような気もしますけど。

多田　田宮さんは非常にデリケートな小説を書いた作家だけれど……。自分の愛をふれてまわるというのはやっぱり恥しいこととちがいますか。

富岡　いまじゃテレビなんか見てても、うまいこと婚約したり結婚したりというのは中身より表向きのほうで喜ばれる。芸人の記者会見なんかたいへんなものでしょう。

多田　フリー・セックスにも純愛にも共通するところは、どちらも「社会」に公開するという姿勢があることですね。

富岡　でも、公開して祝福されたいという日本の純愛と、一つの考え方というか哲学みたいなものをもって出てきたフリー・セックスとはちがうんじゃないかしら。

多田　ぼくは公開性という特徴を共有しているような気がして、もし、昔の神様に代るものが現在のおそらく大文字で書かれるような管理社会だとすれば、そいつが何かコンピューターみたいなものをかかえて、片方では純愛もよろしい、片方ではフリー・セックスもよろしいと、何かそんな計算的な目で見ているような気がする。

富岡　映画のほうは純愛とポルノの二本立てになってきましたね。

多田　富岡さんは、映画の場面だと何でもなんでこんなに素敵に見えるんでしょうといった文章を書いてらしたでしょう。ぼくもかねがね思っていたんです、裏町の路地でも映画だとすごくよく見えるんですよ、そこに住んだらちっともよくないのに。(笑)

富岡　そうなんですよ。だから映画が好きなんだけど。(笑)

多田　やはり映画のように、まあ一種の外化というか、われわれの生活から切りはなして対象を客観視するとすごく魅力的になる。そういうものが恋愛にもある。だから恋愛のイメージというのは、あなたのごひいきのアラン・ドロンと富岡多恵子という恰好であるわけだ。

富岡　映画に出たいな。(笑)

多田　そうすると、見ている人は素敵だなと思うけれども、実際出演している人はちっとも面白くなかったりする。このギャップには何かこわいところがあるでしょう。不可思議なこわい断層がありながら、たえず映画館に吸いこまれてゆく。このギャップはみんなが二六時中映画館へ入ってしまったらなくなるのかな。

富岡　一時、環境芸術というのがいわれたでしょう。環境が全部芸術になっちゃえば、芸術作品なんてつくることなくなるでしょう。映像は、とくにテレビなんかはもう環境ですね。

多田　ところが、純愛というのは一種の環境づくりの合言葉、旗印みたいなところがあるでしょう。うさんくさい思いがありながら、片一方ではアラン・ドロン主演というと、何かポーッとなるというのはどういうわけだろう。(笑)そのへんは吹っ切れないところありますね。富岡さんはポスター写真のアラン・ドロンと恋愛されているそうですが、ぼくは恋愛映画みると、男の俳優のほうは片手でかくすんだ。(笑)

富岡　いいじゃないですか、それ。(笑)

多田　『秋津温泉』とかいった岡田茉莉子の映画でも、男が出てくると不愉快で、名前もおぼえてないな。(笑)片手で隠しながら、ぼくがそこで相手してるかのように見ていると愉快なわけですね。あれもやっぱり純愛だろうか。

富岡　わたしはアラン・ドロンの相手のナタリー・ドロンは隠さないけど。(笑)

多田　ああ、そうですか。

富岡　でもね、隠さないけど、『スクリーン』という雑誌でアラン・ドロンを調べるのよ、いろんなことを。調べて洗っているわけですよ。いつ結婚して、いつ離婚してとか、いまだれと同棲してだれが恋人だとか、全部調べてあるんです。それで恨んでるわけですよ、年中。

多田　そうすると、そのカップルの陰にあなたがいるわけですか、うろうろと亡霊のように。

富岡　いや、わたしがいつもアラン・ドロンとサシで会えるようになっています。(笑)架空恋愛ですから。

多田　そうするとどうなるのかな。映画というのは、現実に対して第三の世界ですね。それを自分の世界にしようという衝動かな。

富岡　わたしの恋してるのは、アラン・ドロンというフランスの男前のスターじゃなくて、ポスター写真のアラン・ドロンですもの。つまり、わたしも多田さんも想像力で虚の世界のリアリティをおぎなっているわけでしょう。現実の恋愛とフィクションのリアリティをうまくさばけるでしょう。しかし、二十歳ぐらいの人はそれはむずかしいでしょう。

多田　実現できることと実現できないこととがごっちゃになっているわけだね。実現できない夢の世界なんだという自覚――芸術はすべて夢の世界みたいなものだけれども、ぼくには夢の世界と現実の世界とを切ってはつなぐイロニーとか笑いがないとおもしろくない。

富岡　そうなんですよ。

多田　富岡さんがアラン・ドロンのことをいくらいっても、そんなこと可能性がないと思っているから喜んで笑っているけどね、明日ほんとにランデヴーでもしたら、これはおもしろくないわけですよ。(笑)

富岡　しらけちゃって。

多田　はなはだ不愉快になる。(笑)そのへんのイロニーが純愛信者にはない。

富岡　距離感がないからですよ。

多田　そう、いまとくにそうなってますね。

富岡　二十歳にもなったら、恋愛の頽廃ということをどうしても知らなければならないという時代もあったと思うのですよ。ところがいまは逆に幼稚になってしまったというか、フィクションの

面白さをリアリティの世界に引きつけて、それを笑いながら楽しむというふうな距離の意識が全然なくなってきたから、逆に本当の恋愛ができなくなったのではないですか。

心中にいたる愛

多田　恋愛というのは、何か不可解な山みたいなもので、その何合目かまで話題がくると、話が途端にしぼんでしまう。周辺を歩いているときは楽しいけれども。どうしてかな。むしろ一挙に頂上から周辺を眺めたほうが事態ははっきりするようなことがらじゃないかしら。

富岡　そう思いますよ。日本の恋愛のピークとして多田さんは「恋愛の失墜」で心中をあげていらっしゃるでしょう。多田さんは、自分は心中というものを卑怯だとは思わないと書いてらして、わたしは賛成ですね。

多田　なんで卑怯だっていうことになったのかしら？　ぼくにはわからない。

富岡　わたしもわかりません。自殺というのはあつかましいなと思って不愉快なんですけど、心中っていうのは全然そう思いませんよね。

多田　どうしてあれが卑怯なのかな。太宰治が死んだときにもそういう反応がありましたね、あれは卑怯だという。

富岡　心中したいなと思いますものね、まだわたしやってないけど。（笑）

多田　「本当」の恋愛の可能性は心中に残っていると思うけれども、心中も「天城山心中」でおしまいじゃないですか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.